



名古屋城 子ども博士になろう



がくしゅう てんしゅ へん
学習シート「天守」編

名古屋城の天守には、どのような特徴があるのでしょうか

天守のあゆみ

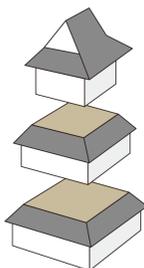


名古屋城は1610年(慶長15)、徳川家康の命によって築城が始まり、1612年(慶長17)に天守が完成しました。天守は本丸に建てられた高層の櫓で、城の中心的な建物です。織田信長が築いた安土城の天守(天主)が始まりとされています。天守の構造は、「望楼型」と「層塔型」の二つに分類されます。「望楼型」は成立時期が古く、一重かに二重の入母屋造りの建物の上に物見のための望楼を載せた形になっています。名古屋城の天守は、その後、新しく築かれるようになった「層塔型」の初期の天

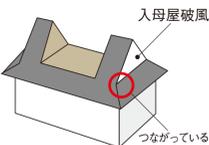
守で、三重目から同じ形の建物を小さくしながら積んでいく構造になっています。また、天守の構成は、付櫓や小天守とのつなぎ方によって四つに区別され、名古屋城の天守は「連結式」に該当します。築城後、名古屋城は御三家筆頭・尾張徳川家の居城として長く栄え、明治維新以後は、陸軍省や宮内省の管理下に置かれました。1930年(昭和5)に、本丸や西之丸、御深井丸が名古屋市所有となり、天守など城内の建造物24棟が、城郭建築として国宝(旧国宝)第一号に指定されました。金鯱が光り輝く天守は、1945年(昭和20)に空襲で焼失するまで、名古屋のシンボルとして多くの人々に愛されました。

天守の構造

層塔型天守



望楼型天守

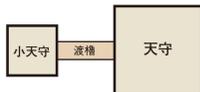


天守の構成

独立式



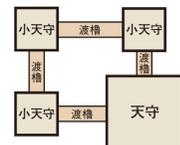
連結式



複合式



連立式



史上最大級の天守



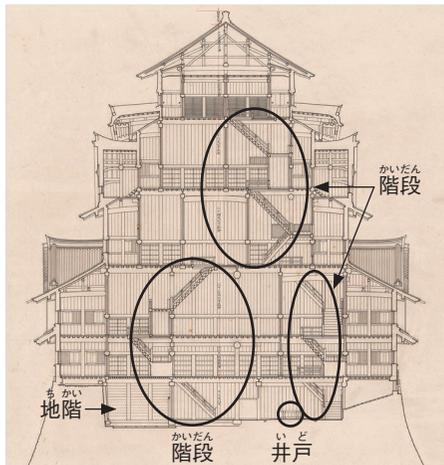
名古屋城の天守は、五重五階、地下一階建てで、地階は橋台(土堀に挟まれた通路)によって小天守とつながっていました。下の写真は、戦災前に撮影された名古屋城天守の古写真(ガラス乾板写真)です。



天守の北西から(戦災前の古写真)

天守の断面図を見ると、天守台石垣の中に造られた地階(穴蔵)や井戸、五重目まで続く階段など、天守内部の構造が分かります。天守本体の高さは36.1メートル、石垣を含めた総高は55.6メートルで、江戸城や徳川大坂城に次ぐ高さでした。

一重と二重は同じ大きさで、総延床面積は約4425平方メートルあり、広さでは日本一でした。また、内部に敷かれていた畳の総枚数は1769畳といわれ、一枚の畳の大きさは長辺が約212センチと特大のものでした。



天守南面「昭和美測図 天守横断面図」
(名古屋城総合事務所 蔵)

ヒノキで築かれた豪華な天守



天守の太い柱には、木曽のヒノキが大量に使用されていました。木曽のヒノキは丈夫で、品質が高いことで知られていました。ちなみに、ヒノキの柱1本の値段は、現在の価格で180万円ほどと算定されています。当時、他の城の天守では松や杉がおもに使われていたことと比べると、かなり豪華な天守であったと考えられます。『熱田之記』には、用木として、ヒノキ角物 2085本・松角物 7778本・ケヤキ角物 408本をはじめ、総数3万7974本の木材が使われたと記録されています。

※角物とは、断面が四角の木材のこと。

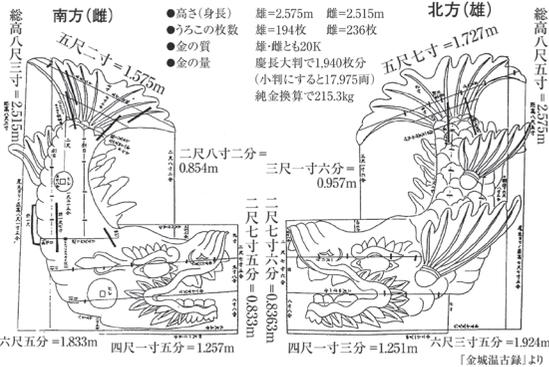
きんしゃち ひか かがや てんしゅ
金鯨が光り輝く天守



てんしゅ おおや ね かがや きんしゃち ちくじょうじ
天守の大屋根に輝く金鯨は、築城時
 せいさく きんじょうおん こらく
に製作されました。『金城温古録』には、
 きんしゃち きた おす みなみ めす しる
金鯨の北が雄、南が雌と記されています。
 こばん にして まん りょう あたい きんしゃち
小判にして1万7975両に値する金鯨の
 かがや さやじ みの じ ある たびびと
輝きは、佐屋路や美濃路を歩く旅人たち
 おどろ しちり わた ふなびと のぞ
を驚かせ、七里の渡しの舟人からも望むこ
とができたといわれます。

【初代：慶長17年(1612)制作】

- 高さ(身長) 雄=2.575m 雌=2.515m
- うろこの枚数 雄=194枚 雌=236枚
- 金の買 雄・雌とも20K
- 金の量 慶長大判で1,940枚分 (小判にすると17,975両)
純金換算で215.3kg



おお は ふ かざ てんしゅ
多くの破風で飾られた天守



てんしゅ がいかん かざ かくじょう
天守の外観を飾るものとして、各重の
 やねめん さんかくけい ちどり は ふ きょくせんけい
屋根面に三角形の千鳥破風や曲線形の
 から は ふ なら ひらがわ ひが
唐破風が並べられていました。平側(東
 しめん にしめん つまがわ みなみめん きためん こうご
面と西面)と妻側(南面と北面)で交互に
 は ふ しゅるい かずい か は ふ そう
破風の種類や数を入れ替え、破風の総
 すう さいじょうじゅう いりも や は ふ くわ
数は最上重の入母屋破風を加えると22
にもなりました。名古屋城の天守は、多く
の破風によって飾られ、見た目も美しく、
へんか と やくどうかん
変化に富み、躍動感にあふれていました。



てんしゅなんめん つまがわ は ふ せんさいまえ こしやしん
 天守南面(妻側)の破風(戦災前の古写真)

たたか そな てんしゅ
戦いに備えた天守



なごやじょう さいごく そな てんしゅ
名古屋城は西国への備えや東海道
を守る砦として、さまざまな防御の工夫
が施されていました。天守地階の入口
 じょうぶ いしおと もうけ てき すじょう
上部には石落しが設けられ、敵を頭上
から攻撃できるようにしていました。ま
 てんしゅ かべ あつ
た、天守の壁は30センチの厚さがあり、
 うちがわ あつ
その内側には、厚さ12センチのかたい
 いた じょう こ
ケヤキの板がよろい状にはめ込まれて
いました。この壁にも外部からはわから
 てっぼうざま かく てき げき
ない鉄砲狭間が隠されていて、敵を撃
 たい
退できるようにしていました。



かしくざま てっぼうざま うちがわ せんさいまえ こしやしん
 隠狭間(鉄砲狭間)の内側(戦災前の古写真)

けやき ほうだんばん うちがわ
櫓の防弾板(内側)



ひのき けしょうばんかべ うちがわ
櫓の化粧板壁(内側)



地階には、籠城戦に備えて井戸も掘られ、地階と一階の両方から水が汲めるようになっていました。築城開始の段階で掘られ、そのあとで天守台の石垣を積み始めたと考えられ

ています。また、地階入り口の床には、鉛製の瓦が敷かれていました。32万発もの弾丸に匹敵する量だったとされています。



天守の地階の井戸
(戦災前の古写真)

宝暦の大改修

築城から100年以上も経つと、天守台石垣下の地盤が沈み、天守が北西方向に大きく傾いてきました。そこで、1752年(宝暦2)から1755年(宝暦5)にかけて、8代藩主の宗勝は、「宝暦の大改修」とよばれる大規模な改修を断行しました。傾いた天守の反対側に大き

なろくろを据え、太い綱を柱に掛け渡して、天守を引き起こし、建物の下にあった石垣を積み直しました。また、この時、天守の一部も解体して、二重以上の土瓦はより軽量で耐用年限も長い銅瓦に取り替えられました。そのほか、破風を銅板張りにして補強したり、四重目から二重目までの破風に銅製の雨樋を設置したりするなどの処置が施されました。

天守閣の再建



戦災による焼失後、名古屋市民の天守閣再建を求める声を受けて、1957年(昭和32)、再建工事が始まり、2年後の1959年(昭和34)には天守閣、小天守閣、正門が完成しました。大小天守閣は、土台下にケーソン(コンクリート製の箱)を埋め、その上に建てられました。近代的な工法によって造られましたが、外觀は、焼失前の実測図をもとに忠実に再現されています。



再建された天守閣

※古写真はすべて名古屋城総合事務所蔵